別　紙

里海創生支援事業とは
～里海の創生に向けて～

平成20年7月　環境省

閉鎖性海域の現況

・水質改善が横ばいで、未だに赤潮が頻発
・底質改善が進まず、底層貧酸素化の続発
・生態系の劣化（藻場・干潟等浅場の減少、生物多様性の低下）
・漁獲量・漁業生産量の急激な減少
・海岸線の荒廃による自然環境、景観の悪化（地形改変、海浜浸食）
・島嶼部の生活環境の急激な悪化
・沿岸域・海域での海洋ごみの増大
・埋立等による親水性の喪失、未利用地の増大
・海に対する環境意識の希薄化

（参考文献）
柳哲雄著「里海論」
瀬戸内海研究会議編「瀬戸内海を里海に」

・物質循環機能の低下　・生態系の劣化　・国民の無関心の拡大

閉鎖性海域は荒廃の危機

里海による再生が必要

里海創生に向けた取組の流れ

・21世紀環境立国戦略（豊饒の「里海」の創生）
・第三次生物多様性国家戦略、海洋基本計画（「里海」概念の具体化）　等

里海創生検討会
（平成19年度）

里海に関する論点の再整理、海域環境の保全活動の実践事例の収集により、以下を整理。
・里海の定義とその創生効果
・里海30選（仮）の選定の考え方
・里海創生支援海域の選定の考え方

里海創生支援事業
（平成20～22年度）

沿岸自治体を巻き込んで実施

・里海の創生効果を把握するため、里海創生支援海域を選定し、現地調査を実施（平成20年度～）
・里海30選（仮）を選定（平成22年度）し、里海づくりマニュアルとして取りまとめ（平成22年度）
・シンポジウムの開催や海外への発信

里海創生による閉鎖性海域の保全・再生

里海の定義とその創生効果

（1）定義

●柳教授の定義や国の基本計画等における整理等を踏まえ、以下のとおり定義する。

『 人間の手で陸域と沿岸域が一体的・総合的に管理されることにより、物質循環機能が適切に維持され、高い生産性と生物多様性の保全が図られるとともに、人々の暮らしや伝統文化と深く関わり、人と自然が共生する沿岸海域 』

（2）構成要素

●里海は、単なる空間概念に留まらず、人々の活動の中で発生する概念。
●里海は、「物質循環」、「生態系」及び「ふれ合い」という保全・再生される3つの要素と「場」と「主体」という2つの活動要素により構成される。
●里海は、5つの構成要素により多様なものであり、海域の特性に応じ柔軟に存在することが可能であり、今後、様々な海域への普及が可能である。

（3）閉鎖性海域の現況

●荒廃の危機に瀕している。

（4）創生により期待される効果

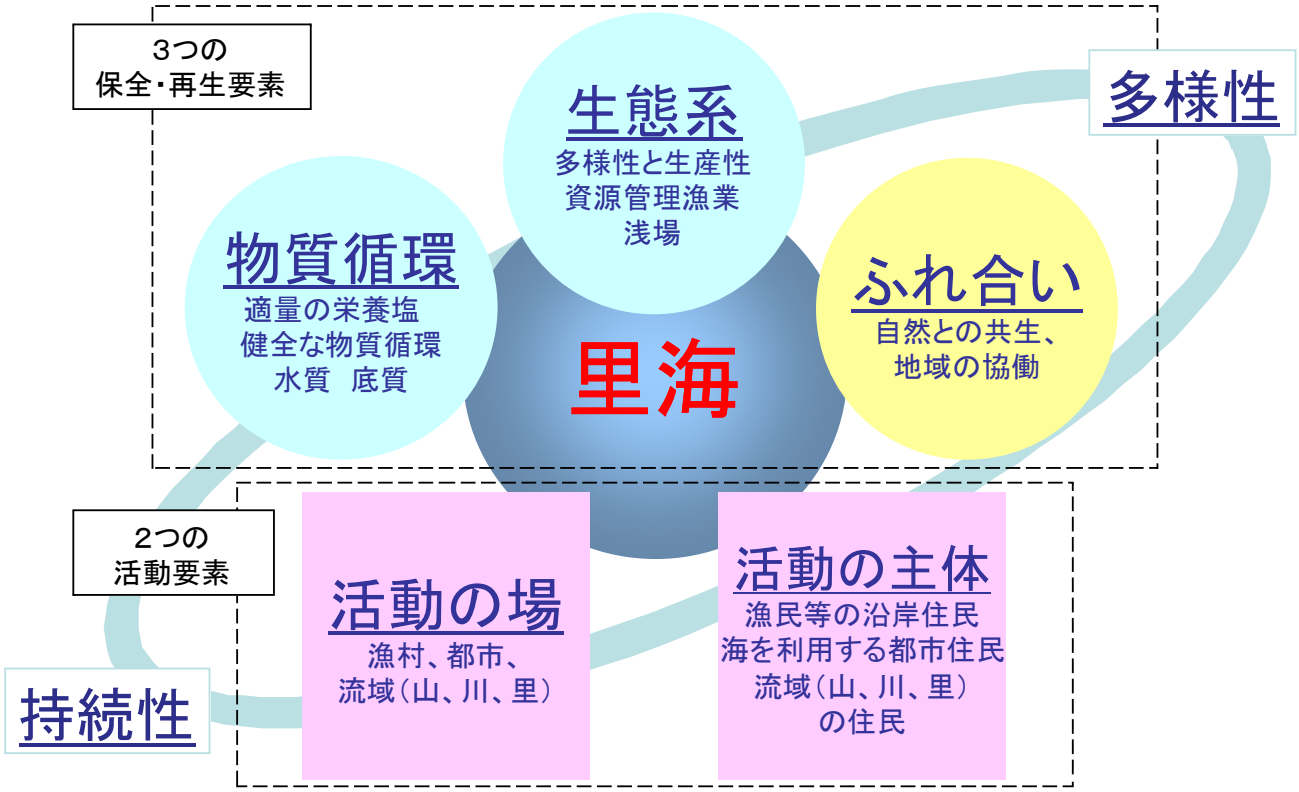
●「物質循環」、「生態系」及び「ふれ合い」の保全・再生により海域環境の保全・再生が期待される。

（5）その他留意事項

●里海は、生活習慣等と結びつくことで持続性を持ちうる。
●里海づくりは、沿岸域の総合的管理に活用できる参加協働型のツールである。

里海創生の視点

里海創生の視点＝里海の構成要素



里海の類型化　～活動の「場」と「主体」から～

多様性・持続性					類型	活動の特徴
地域性		物質循環	生態系	ふれ合い		
活動の場	活動の主体（生活の場）					
流域（山村）	流域＋漁村	取組により、程度は様々			流域一体型	森・川・里を一体として捉えた活動　等
都市	都市				都市型	都市直近に位置する藻場等の浅場の保全や再生活動　等
	事業者（+都市）				ﾐﾃｨｹﾞｰｼｮﾝ型	都市の開発に伴い失われた環境の再生活動　等
漁村	―（手を加えない管理）				鎮守の海型	禁漁区、禁漁期等の設定による手を加えない管理　等
	漁村＋流域、都市				体験型	都市近郊に位置し、都市住民による体験活動　等
	漁村				漁村型	漁村に位置し、漁業活動の中で実施される活動　等

里海創生支援事業（平成20～22年度）

①漁業衰退による物質循環の低下　②生物生息環境の悪化による生態系の劣化　③国民の無関心

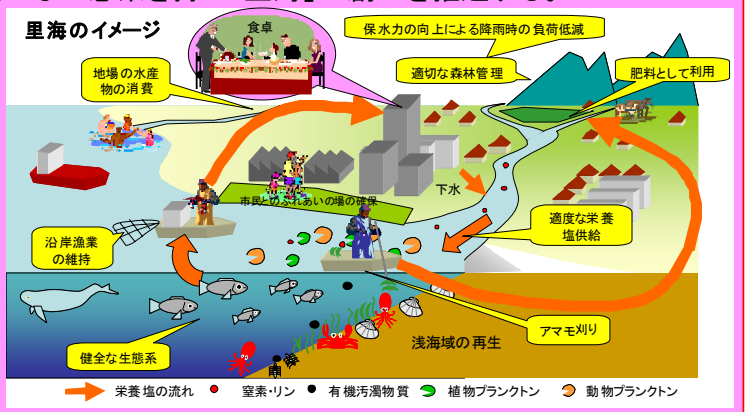
・21世紀環境立国戦略（**豊饒の「里海」の創生を位置付け**）
・第三次生物多様性国家戦略、海洋基本計画（**「里海」概念の具体化、重要性の明記**）　**等**

陸域と沿岸域の一体性について国民の理解を深めるとともに、人間と海との共生を推進し、人間の手で管理がなされることにより生産性が高く豊かな生態系を持つ「里海」の創生を推進する。

①里海創生支援海域の選定・支援
・海域環境の保全や海との共生に取り組んでいる海域の中から、里海創生効果を定量的に評価可能な海域を選定し、現地調査等を支援
・初年度は実験的に2海域程度、平成21年度から全国展開

②里海30選（仮）の選定
・今後の創生活動の際に参考とすべき先進的な海域を選定
・活動の場と主体を踏まえ類型的に整理

③里海づくりマニュアル
・今後、地域の実情に応じた創生活動に取り組む方が活用できるものとして整理



④シンポジウムの開催、広報等の実施

⑤EMECSと連携し海外への情報発信

地域の実情を踏まえた里海づくりの推進

里海30選（仮）とは

里海30選（仮）とは・・・

○里海の創生活動に取り組む際に参考とすべき先進的な海域を選定するもの。
○活動の場と主体を踏まえて類型し、「里海づくりマニュアル」の取りまとめに反映。
○今後3ヵ年かけて検討し、平成22年度に選定。

選定に際しての基本的な考え方

○里海創生の視点である物質循環・生態系・ふれ合い・活動の場及び主体が評価できること。

里海30選（仮）の選定の考え方

選定にあたっては、以下の観点から取り組まれている活動を評価し、選定する。

○主な評価項目

評価項目	評 価 の 観 点
物質循環	・対象海域の物質循環の保全に資する程度　等
生態系	・対象海域の生態系の保全に資する程度　等
ふれ合い並びに活動の場及び主体	・海との共生、地域の協働に資する程度 ・活動の持続性に資する程度　等 （地域づくりにおける環境保全及び海との共生という観点 社会活動としての重要性 地元の自治体や住民等による活動との連携 分野横断的な活動 適切かつ効果的な普及啓発　等）

里海創生支援海域とは

里海創生支援海域とは・・・

○里海創生支援事業により里海の創生活動を支援するため、海域環境の保全や海との共生に取り組んでいる海域の中から創生活動の効果を定量的に評価可能な海域を選定。

○平成20年度から選定し、現地調査等を支援。

選定に際しての基本的な考え方

○定量的に創生活動による効果を評価できる物質循環・生態系の保全を重点的に評価。

里海創生支援海域の選定の考え方

選定にあたっては、里海30選（仮）の選定基準に準拠するが、定量的に創生活動による効果を評価できる物質循環・生態系の保全について、以下の観点から重点評価を行う。

○重点評価項目

評価項目	評 価 の 観 点
物質循環 ・ 生態系	・活動によりどのような効果が期待されるか。 ・対象海域において、期待される効果はどのような重要性を持っているか。 ・期待される効果を定量的に評価できるか。 ・定量的に評価するための適切な調査項目が選定されているか。 ・調査計画は適切であるか。